

平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究終了報告書

◆記入に当たっては、「平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究終了報告書記入要領」を参照してください。

ローマ字		YASUNAGA HISASHI				
①研究代表者氏名		安永 尚志		②所属研究機関・部局・職 人間文化研究機構国文学研究資料館・複合領域研究系・教授		
③研究課題名	和文	国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信				
	英文	International Collaboration for Japanese literary Studies				
④研究経費 金額単位：千円	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	総合計
	21,700	18,100	18,100	21,500	21,700	101,100
⑤研究組織（研究代表者及び研究分担者） *平成18年3月31日現在						
氏名	所属研究機関・部局・職		現在の専	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）		
安永 尚志	国文学研究資料館・複合領域研究系・教授		情報工学	研究代表者、総括、国際関係		
原 正一郎	同・複合領域研究系・助教授		情報工学	研究分担者、メタデータ、資源共有化		
武井 協三	同・文学形成研究系・教授		文学	総合軸の推進、ディレクトリ		
鈴木 淳	同・文学資源研究系・教授		文学	概念軸の推進、コンテンツ構築		
田淵 旬美子	同・文学資源研究系・教授		文学	著書軸の推進、コンテンツ構築		
伊井 春樹	同・館長		文学	資源共有化調整		
佐藤 信子	同・複合領域研究系・研究機関研究員		文学	コンテンツ構築、管理運用		
柴山 守	京都大学・東南アジア研究所・教授		情報工学	コラボレーション、ネットワーク		
堀川 貴司	鶴見大学・文学部・教授		文学	著者軸の推進、コンテンツ構築		
⑥当初の研究目的（交付申請書に記載した研究目的を簡潔に記入してください。）						
<p>インターネットの普及により、海外において日本語デジタル資料を入手することは容易となってきたが、学術研究で必要である資料や情報はまだまだ質量共に貧弱である。また、国を跨ぐ相互利用は極めて困難である。一方、各国における日本文化研究（とくに、日本文学研究）の実態は、日本においてもあるいは他国においても、殆ど揃っていない。</p> <p>本研究は、国文学研究資料館におけるシステム環境と連携し、とくに海外の研究者を交えたコラボレーション（電子的協調作業方式）による日本文学のためのコンテンツの充実、すなわち共同構築とその流通促進を研究目的とする。さらに、欧米に共同研究拠点を形成し、各国での事情と要求に沿ったコンテンツの収集と蓄積をはかるため、コラボレーション・システムを構築し、実用化を図る。また、日本および各国間の学術情報資源の相互利用を促進するための方策を検討し、とくにシステム環境を構築し、実用化をはかる。具体的に次の3課題を研究する。</p>						
1. 日本文学のための国際化コンテンツの整備と発信（コンテンツ研究）						
海外の研究者および研究機関等の研究ディレクトリ、研究論文目録データベース、日本文学作品の各国語翻訳の目録データベースの共同構築など。発信環境の整備と発信。						
2. 日本文学研究資料のデジタル・アーカイブズの共同構築と利用（コラボレーション研究）						
古典文学作品のフルテキストデータベース化と発信、具体的な研究課題（例えば、奈良絵本、古筆切など）によるコラボレーションによる双方向運用可能な国際共同利用型システムの構築と運用、総合的デジタル・アーカイブズの整理と発信。						
3. メタデータ・データベースの構築と共有化（システム研究）						
人文系研究機関等の日本文学に関わる情報のメタデータ共同構築をはかり、国際標準型検索規約の実証実験を進め、情報資源共有化の実証実験を行う。						

⑦研究成果の概要（研究目的に対する研究成果を必要に応じて図表等を用いながら、簡潔に記入してください。）

[1] 研究拠点の形成とコラボレーションの推進と成果

海外の日本学関連の研究機関との連携を図り、多くの研究機関および研究者とのコラボレーションが実現した。例えば、英国ではオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学等、仏国ではコレージュドフランス、パリ第7大学等、伊国ではヴェネチア大学、フィレンツェ大学、ナポリ東洋大学、ローマ大学等、米国ではプリンストン大学、カリフォルニア大学等、中国では浙江大学、北京大学等、台湾では輔仁大学、台北大学等、韓国ではソウル大学等、インドではデリー大学等である。その他にも、オランダ、ドイツ、東欧諸国、エジプト等がある。一方、各国における学会等の研究連携を進め、共同研究を進めた。BAJS（British Association for Japanese Studies, 英日研究学会）、AISTUGIA（Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi, 伊日研究学会）、SFEJ（Societe Française des Etudes Japonaises, 仏日研究学会）、AAS（The Association for Asian Studies, アジア学研究学会）等である。また、国際学会では、EAJS（European Association for Japanese Studies）との協力を得ている。

[2] 研究ディレクトリの構築と発信

海外研究拠点における研究者ディレクトリ、研究論文目録、翻訳作品目録等のデータベース化による情報資源の蓄積を行い、専用ホームページから公開した。とくに、AISTUGIA並びにSFEJとのコラボレーションにより、主な研究論文と日本文学作品翻訳書の目録データベースを完成し（発表文献の大半をカバー）、その公開により極めて高い評価を得た。

[3] コンテンツ研究成果

各国の研究者とのコラボレーションにより、研究上重要な学術情報を選び、組織化法を検討し、具体的なデータ収集を行い、データベースを構築した。古典学における電子化テキスト構築法を実証的に研究し、国際標準マークアップ言語（SGML/XML）による電子化テキストを作成し、実用化を進めた。とりわけ、KOKIN ルールに基づく日本古典文学本文データベース（岩波書店刊行旧版「日本古典文学大系」全100巻600作品）について、データ変換法を確立し、テキストデータの共有化を促進した成果は大きい。国文学研究資料館の事業として公開されている。さらに、奈良絵本を基として、原本イメージ情報とそのテキストとの比較や対応を含むマルチメディア処理の研究を進め、成果を得た。サレジオ大学（伊国）マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録の英文編を刊行した。

[4] コラボレーション研究成果

各国研究拠点において、コラボレーション・システムの要求仕様を固めた。源氏物語を中心とする定評のある古筆切を画像データベース化し、インターネットを介して注釈や翻刻等のアノテーションを行うシステムを実用化した。実際に、研究者間でアノテーション研究を行い、高い成果を得た。さらに、蔵書印を対象としてコラボレーションを行うシステム環境も完成し、実用化した。一方、複数の情報資源をネットワークで統合し、利用者に仮想的に1つの情報資源を提供し、共同研究を実施するための研究環境であるコラボレーション・システムの開発研究を進め、成果を得た。

[5] システム研究成果

分散情報資源の相互利用法による新しい古典学の形成の可能性を探る研究を行った。Dublin Core によるメタデータと Z39.50 による標準検索プロトコルの利用可能性を研究し、その有用性を確認した。国文学研究資料館、総合研究大学院大学共同研究プロジェクト「資源共有化」と密接な連携を強化し、データベースの一元的共有化実証実験を推進した。国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、東京大学史料編纂所、大阪市立大学等との情報資源共有化接続実験に成功した。この成果は、現在人間文化研究機構が進める研究資源共有化事業に用いられている。

[6] 研究成果の公表

関連する様々な国内外の研究集会に積極的に参加し、研究発表並びに報告を行った（各年度研究成果報告書）。2003年度には、日本学術振興会による高い中間評価を受けた。2004年度では公開の国際研究集会を開催し、伊、仏、台、印の研究者を招聘し、評価を含めた研究発表やシンポジウムを行った。延150余名の参加を得て高い評価を得た。2005年度は、イタリアにおいてAISTUGIAと共催で、ICJS（International Collaboration for Japanese literary Studies, 日本文学国際共同研究）研究集会を開催し、研究発表を行い、国際的な評価を受け、研究成果の有用性を確認した。

なお、研究成果報告書は各年度に発行し、海外を含む関連研究機関に配布している。また、最終年度は全研究成果のとりまとめを行い、研究成果報告書を発行した。専用ホームページは、日本古典文学本文データベース（<http://www.nijl.ac.jp/>）、国際コラボレーション計画（<http://www.nijl.ac.jp/~kiban-s/>）である。

⑧特記事項 (この研究において得られた独創性・新規性を格段に発展させる結果あるいは可能性、新たな知見、当該研究分野及び関連研究分野への影響等、特記すべき事項があれば記入してください。)

本研究は、所期の研究目的を達成し、期待以上の研究成果を得て無事完了した。この研究は、外国の研究者を交えたコラボレーション（電子的協調作業方式）による日本文学とその周辺のためのコンテンツの充実、すなわちデジタル・アーカイブズの共同構築とその流通促進を目的とした。

[1] 国際コラボレーションと研究情報資源の組織化

具体的に、欧米に共同研究拠点を設け、各国での事情と要求事項に従ったコンテンツの収集と蓄積をはかった。これらの研究成果は、すでにインターネットを通じて、海外に提供され利活用されている。例えば、日本文学とその周辺に関わる研究者ディレクトリ、研究機関ディレクトリ、発表された研究論文目録、翻訳された日本文学作品目録などの構築が進み、公開されている。とりわけ、イタリアやフランスにおいては、これらの情報はほぼ完成に近く、網羅度も高く、極めて有用性が高いとされている。その他の国においても、順次データベースの構築が進んでいる。このような網羅的な研究情報の組織化は国際的にも初めての事例である。得られた研究成果の継承は、国文学研究資料館および京都大学東南アジア研究所において、データベース事業として計画されている。

特筆すべき点として、イタリア、フランスについては、確実な研究拠点を構築でき、ほぼ恒久的なコラボレーションの下に、運用可能なシステム環境と体制を整えることができた。さらに、様々なコンテンツを蓄積し、それらの高次利活用によるコラボレーション研究の推進も行った。例えば、実際に古筆切の同定や注釈研究ができるコラボレーション・システムの開発研究を行い、その実現をはかり、現在実用段階を迎えている。これらの綿密かつ緊密な研究者間の息の長い交流を通じて、現在国文学研究資料館との学術交流協定の締結を実現するまでの成果を得ている。

[2] コンテンツ整備と発信、コラボレーション研究の推進

日本文学研究のためのコンテンツ整備と発信も重要な研究課題である。データ作成に当っては、国際標準化をはかり、国際的な資源共有化を推進した。例えば、日本古典文学作品の全文データベース化に当たり、データ記述に国際標準である XML (eXtensible Markup Language, 拡張可能マークアップ言語) を適用し、その可能性の実現を人文科学では初めて明確化した。約 200 作品もの DTD (Document Type Definition, データ型定義) の定義と XML 化を実現し、ホームページから公開している。これにより、XML による日本古典文学作品のデータ記述法が確立した。

また、貴重書である国文学研究資料館所蔵奈良絵本全 14 点の画像データベースの構築を行い、コラボレーションを通じて全文の翻刻を行い、画像とテキストとの対応が可能な奈良絵本データベースを構築し、発信している。これも極めて有用性が高く、高い評価を得ている。さらに、多種の古筆切、蔵書印等を比較し、注釈や同定を行うアノテーションシステムを開発した。インターネットを介して、研究者が密接にコラボレーションを行い、源氏物語の古筆切同定等に実用的な成果を得ている。

[3] 情報資源共有化

国際コラボレーションのための資源共有化システムの構築と提供を行った。関連するデータベースを個々に切り替えて利用するのではなく、言わば一度にシームレスに横断的に万遍なく検索し、利活用する仕組みを構築した。人文科学の領域で構築され、公開されている各種の情報資源やデータベースも膨大なものとなりつつある。研究者が研究を進めるに当たり、これらの研究資料、情報を縦横に利活用することは極めて重要な要件である。技術的要件としては、国際標準情報検索プロトコルである Z39.50 プロトコル、並びに事実上の国際標準である Dublin Core メタデータを前提とした。これらを人文科学研究素材である多種多様な情報資源に適用し、具体的なデータベースの相互運用をはかった。この方式によるデータベースの相互運用は、我が国においても初めての試みであり、かつ国際的にも新しい。とくに、両者の結合による研究例はなく、技術移転を含め、多くの分野で研究成果が直ちに役立つと期待され、極めて高い評価を得た。

現在、7 つの人文科学系研究機関の約 30 個のデータベースが相互接続され、実際に運用されている。さらに、本方式は人間文化研究機構が進める研究資源共有化事業における重要な基盤技術となり、緊密な実用化のための連携協力が進められている。

[4] 研究成果の公表

全体として、期待以上の研究成果をあげ高い評価を得た。初年度から専用ホームページを立上げ、コンテンツの発信を進め、研究成果の公表を行った。毎年、研究成果報告書を作成し、国内外の関連研究機関に配布した。さらに、最終年度の研究成果報告書 (1410 頁, CD-ROM 版も作成) を刊行した。なお、海外を含む延 40 名の研究協力者の協力を得た。

- ⑨研究成果の発表状況 (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会、特許等の発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。)
- [1] 原正一郎, 安永尚志: メタデータによるマルチメディアデータ統合の試み, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会, 2001-CH-51-67, pp.47-54, 2001
- [2] 原正一郎, 安永尚志: 国文学研究支援のためのデータベース統合の試み, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, vol.2001, No.18, pp.125-132, 2001
- [3] 原正一郎, 安永尚志: 文学研究のためのデータベースシステムの諸問題, 日本語学, 20, pp.48-60, 2001
- [4] H.YASUNAGA: Il Progetto di Collaborazione Internazionale del Kokubungaku Kenkyu Shiryokan (国文学研究資料館の国際コラボレーション計画), AISTUGIA, XXV, pp.23-28, 2001
- [5] 原正一郎, 安永尚志: 国文学研究支援のためのSGML/XMLデータシステム—国文学データ共有のための標準化—, 情報知識学会論文誌, Vol.11, No.4, pp.17-34, 2002
- [6] S. HARA and H. YASUNAGA: Resource Sharing System for Humanity Researches, 3rd LREC (International Conference on Language Resources and Evaluation), LREC2002, 3, pp.51-58, 2002
- [7] 山西史子, 安永尚志: データベースは研究に影響を与えるか—日本古典文学本文データベース利用調査—情報知識学会第10回研究報告会講演論文集, pp.1-4, 2002
- [8] 安永尚志: 日本文学研究情報組織化のための国際コラボレーション計画, 情報知識学会第10回研究報告会講演論文集, pp.57-60, 2002
- [9] H. YASUNAGA: International Collaboration Research for Japanese Literature, 2002 PNC Conference (Pacific Neighborhood Consortium) Abstracts, pp.18-23, 2002
- [10] H. YASUNAGA: A feasibility study on the International sharing and standardization of information resources for Japanese literature research and education, AIDLG (Associazione Italiana Didattica Lingua Giapponese), II-2002, 2002
- [11] 安永尚志: 古典学のための情報処理, 論集「情報処理」, 特定領域研究「古典学の再構築」研究成果報告書IV, (株)シンクス, A4判, 210頁, pp.14-71, 2003
- [12] H. YASUNAGA, S.HARA, Phillip T. HARRIES and Drew GERSTLE: Request for Participation on the Project ICJS-International Collaboration Research for Japanese Literary Studies-, Conference Abstract of BAJIS, 2003
- [13] H. YASUNAGA, B. RUPERTI and Ikuko SAGIYAMA: An interim reports on the project ICJS: International Collaboration for Japanese literary Studies, AISTUGIA XXVII, pp.453-460, 2003
- [14] 原正一郎, 柴山守, 安永尚志: メタデータによるデータベースの機関間連携の実現—人文科学データ共有のための標準化—, 情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, pp.17-22, 2003
- [15] 安永尚志: 日本文学国際共同研究プロジェクトの中間研究報告, 情報知識学会誌, Vol.14, No.2, pp.61-66, 2004
- [16] 安永尚志: 国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信—科学研究費基盤研究(S)による—, アジア遊学, 勉誠出版, pp.51-55, 2004
- [17] 安永尚志: 日本文学国際共同研究プロジェクト—科学研究費基盤研究(S)による—, アーカイブズ研究, 1, pp.1-9, 2004
- [18] 山本泰則, 原正一郎, 柴山守, 安達文夫, 合庭惇, 安永尚志: Dublin CoreメタデータとZ39.50プロトコルにもとづく人文学系データベースの統合検索に関する実証実験, 人文科学とコンピュータシンポジウム, pp.199-205, 2004
- [19] 安永尚志: 文化科学研究分野における資源共有化に関する研究, JMP研究会, 東大史料編纂所, 2004
- [20] 安永尚志: 文化科学研究分野における情報資源共有化について, 情報知識学会誌, Vol.15, No.2, pp.1-6, 2005
- [21] 安永尚志: 文学研究資料・情報のデータベースと国際コラボレーション, 教育研究プロジェクト特別講義録, 第2号, 64頁, 総合研究大学院大学日本文学研究専攻発行, 2005
- [22] 安永尚志, 佐藤信子, 大内英範: 日本文学国際共同研究について, ICJS研究集会予稿集 (AISTUGIA XXIX), pp.13-14, 2005
- [23] 安永尚志: 第7章 古典データベースと漢字, 漢字と社会 (朝倉漢字講座第4巻), pp.162-203, 朝倉書店, 2005
- [24] 原正一郎: 国文学研究情報組織化のための国際コラボレーション計画, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, pp.47-52, 2002
- [25] 原正一郎: Z39.50とメタデータによる研究機関間連携, 情報処理, vol.43, No.9, 失われ行く情報の復元・保存技術, pp.968-974, 2002

- ⑨研究成果の発表状況（続き）（この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文（掲載が確定しているものを含む。）の全著者名、論文名、学協会誌名、巻（号）、最初と最後のページ、発表年（西暦）、及び国際会議、学会、特許等の発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。）
- [26]原正一郎：OCR for Japanese Classical Documents, Proc. of First Inter. Conf. on Info. Tech. and Appl., 6 pages in CD-ROM, 2002
- [27]原正一郎：Dublin Core メタデータと Z39.50 プロトコルにもとづく人文科学系データベースの統合検索に関する実証実験, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, pp.199-205, 2004
- [28]原正一郎：Application of GIS to Historical Documents -Creation of geo-temporal database on historical earthquakes in ancient and medieval ages in Japan-Program and Abstract of PNC 2005 Annual Conference in Conjunction with PRD (Editing), 2005
- [29]原正一郎, 相田満, 入口敦志, 江戸英雄, 五島敏芳, 山田直子：データベース共有におけるデータマッピングの事例的研究, 情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ, 2005-CH-67, pp.31-38, 2005
- [30]原正一郎：研究資源共有化の研究, 日本歴史, No.693, pp.26-31, 2006
- [31]武井協三：歌舞伎の女形—上方から江戸へ—, 2002 年度科研報告書「国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信」, pp.181-198, 2003
- [32]武井協三：ゴシップ誌の登場—芝居町の女—, 江戸文化とサブカルチャ, 国文学「解釈と鑑賞」別冊, pp.160-168, 2005
- [33]武井協三：元禄歌舞伎の新出番付—紹介と考証—, 近松研究所紀要, 15 号, pp.21-28, 2005
- [34]堀川貴司：購入古典籍略解題 中・近世日本文学の基礎的知識体系に関する研究, 平成 15,16 年度科学研究費研究成果報告書, pp.68-70, 2005
- [35]堀川貴司：こぼれ咲きの花々—禅林ゆかりの小作品群—, 国文学解釈と教材の研究, 50 巻 10 号, pp.108-113, 2005
- [36]堀川貴司：懐古詩歌帖翻刻と解題, 松尾編『海王宮一壇之浦と平家物語』, 三弥井書店, pp.53-88, 2005
- [37]鈴木淳：橘千蔭の和文と『源氏物語』, 岩波書店, 文学, 第五巻第五号, pp.165-178, 2004
- [38]鈴木淳：高野切の江戸, 岩波書店, 和歌をひらく, 第二巻「和歌が書かれるとき」, pp.77-99, 2005
- [39]鈴木淳：松平定信の絵巻物フェティシズム, 岩波書店, 文学, 第 7 巻第 1 号, pp.42-53, 2006
- [40]田淵句美子：阿仏尼の『源氏物語』享受—『乳母のふみ』を中心に—, 源氏物語の鑑賞と基礎知識 28, 蜻蛉, pp.254-268, 2003
- [41]田淵句美子：『物語二百番歌合』の方法—『源氏物語』の作者表記を中心に—, 『源氏研究』, 9, pp.138-154, 2004
- [42]田淵句美子：『十六夜日記』（物語の舞台を歩く）, 山川出版, 2005
- [43]柴山守, 吉井良邦：近世資料アーカイブズのためのバーチャル図書館, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol.2001, No.18, pp.109-116, 2001
- [44]柴山守, 吉井良邦：近世資料データベースと Z39.50 標準による統合検索, 大阪市立大学学術情報総合センター紀要, Vol.3, PP.41-49, 2002
- [45]後藤真, 柴山守：正倉院文書復原過程の XML/XSLT による記述, 情報知識学会誌, Vol.11, No.4, pp.2-16, 2002
- [46]山田奨治, 柴山守：古文書を対象にした文字認識の研究, 情報処理, Vol.43, No.9, pp.950-955, 2002
- [47]後藤真, 柴山守：正倉院文書研究資料の XML/XSLT による記述と統合, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol.2002, No.13, pp.209-216, 2002
- [48]後藤真, 柴山守：正倉院文書復原過程の XML/XSLT による記述, 情報知識学会誌, 11.4, pp.2-16, 2002
- [49]Mamoru Shibayama and Yasuyuki Kono : Proceedings of Symposium on Area Informatics - Potential of GIS/RS in Area Studies-, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2003
- [50]後藤真, 柴山守：正倉院文書の情報化と復原, 『正倉院文書研究』9, 吉川弘文館, pp.130-149, 2003
- [51]Xian Feng Song, Yasuyuki Kono, Koji Tanaka and Mamoru Shibayama : Integrating Geographic Collection Database Repositories with Z39.50-Compliant Gateway, Asian Journal of Geoinformatics, Vol.4, No.2, pp.31-36, 2003
- [52]SONG Xianfeng, 柴山守, 河野泰之, 田中耕司 : Isite Z39.50/Dublin Core による東南アジア地域地形図画像データベース, Journal of Geoinformatics, Vol.15, No.2, pp.120-121, 2004
- [53]Xianfeng Song, Yasuyuki Kono, and Mamoru Shibayama : Environmental Cambodia: An Open Source GIS Approach to Web Mapping, International Journal of Geoinformatics, Special Issue, Vol.1, No.1, pp.63-70, 2005
- [54]Mamoru Shibayama, Atsushi Kajiyama, Venkatesh Raghavan, and Yasuyuki Kono : Mapping Historical Maritime Exchanges between Vietnam, Thailand and Japan, International Journal of Geoinformatics, Special Issue, Vol.1, No.1, pp.139-145, 2005
- [55]佐藤信子：篠山市立青山歴史村蔵『松が浦嶋』翻刻と解題, 国文学研究資料館紀要, 31, pp.139-190, 2005

- ⑨研究成果の発表状況（続き）（この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文（掲載が確定しているものを含む。）の全著者名、論文名、学協会誌名、巻（号）、最初と最後のページ、発表年（西暦）、及び国際会議、学会、特許等の発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。）
- [56]佐藤信子：大英図書館蔵「御手鑑」、 「古筆手鑑」の報告，2003年度科学研究費基盤研究(S)「国際コラボレーションによる日本文学資料情報の組織化と発信」研究成果報告書，pp.151-165，2004
- [57]佐藤信子：翻訳書データベースについて，2004年度科学研究費基盤研究(S)「国際コラボレーションによる日本文学資料情報の組織化と発信」研究成果報告書，pp.125-130，2005
- [58]佐藤信子：『安嘉門院四条五百首』の諸伝本一附十社百首拾遺，国文学研究資料館紀要，32，pp. 45-68，2006
- [59]佐藤信子：古筆切データベース・蔵書印データベースについて，2005年度科学研究費基盤研究(S)「国際コラボレーションによる日本文学資料情報の組織化と発信」研究成果報告書，pp.183-188，2006
- [60]伊井春樹：The Salvation of Mokuren's Mather and Akikonomu's Serviese for the Soul of Lady Rokujuyo, Manaku, Unita Kannakanna, Imaging India Imaginf Japan, pp.109-118, 2004
- [61]伊井春樹：世界文学としての源氏物語，笠間書院，207頁，2005
- [62]中村康夫，安道百合子，池田尚隆，福長進他9名：国文学研究資料館データベース古典コレクション4．歴史物語データベース（CD-ROM），岩波書店，2003
- [63]中村康夫，松本智子：扶桑拾葉集，国文学研究資料館本文共有化研究プロジェクト成果報告書，491頁，2005
- [64]相田満：CTS データとデータベースデータをつなぐコラボレーション「古典人名・人物年表データベース」プロジェクトから，PNC Annal Conf. and Joint Meeting 2002, Vol.2002, No.13, pp.129-136, 2002
- [65]相田満：古典的オントロジ資源の可能性—和漢古典学のオントロジ，情報処理学会論文集「人文科学とコンピュータシンポジウム2003」, Vol.2003, No.21, pp.47-54, 2003
- [66]伊藤鉄也編著：海外における平安文学，国文学研究資料館，349頁，2005
- [67]伊藤鉄也編著：海外における日本文学研究論文1，国文学研究資料館，139頁，2005
- [68]伊藤鉄也編著：海外における日本文学研究論文1+2，国文学研究資料館，304頁，2006
- [69]江戸英雄：国際学術交流と日本の古典文学，アジア遊学，69，pp.7-18，2004
- [70]入口敦志：台北における日本の古典籍，アジア遊学，69，pp.116-122，2004
- [71]山下則子：サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録，国文学研究資料館調査研究報告，23，pp.1-73，2002
- [72]山下則子：ヴェネチア東洋美術館所蔵日本書籍および関連資料目録，国文学研究資料館調査研究報告，25，pp.139-172，2004
- [73]中野真麻理：善光寺への道—短冊の縁を読む—，国文学研究資料館紀要，31，pp.231-276，2005
- [74]大友一雄：アーカイブズを理解する—史料構造論の展開—，柏書房，アーカイブズの科学（下巻），pp.2-16，2003
- [75]五島敏芳：「国際標準：記録史料記述の一般原則；ISAD(G)」とXMLの利用：ISAD(G)第2版準拠史料記述によるXML利用実験を中心に，科学研究費基盤研究(S)「国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信」研究成果報告書，pp.297-314，2003
- [76]五島敏芳：EADによる電子的検索手段のデータ記載形式：いくつかのEAD最良実践ガイドラインから，情報知識学会誌，15-2，pp.25-32，2005
- [77]小口雅史，家辺勝文，鈴木卓治：日本古代史料集の高精細全文テキストデータ構築と検索システムの開発—青森県史資料編古代1・同補遺全文データCD-ROMを事例として—，情報処理学会，人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，Vol. 2003，pp. 235-242，2003
- [78]安永尚志編：2001年度科学研究費基盤研究（S）研究成果報告書，248頁，2002
- [79]安永尚志編：2002年度科学研究費基盤研究（S）研究成果報告書，382頁，2003
- [80]安永尚志編：2003年度科学研究費基盤研究（S）研究成果報告書，232頁，2004
- [81]安永尚志編：2004年度科学研究費基盤研究（S）研究成果報告書，174頁，2005
- [82]安永尚志編：2005年度科学研究費基盤研究（S）研究成果報告書，200頁，2006
- [83]安永尚志編：サレジオ大学 マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録（英文編），152頁，2006
- [84]安永尚志編：2001～2005年度科学研究費基盤研究（S）全研究成果報告書，1258頁，2006
- [85]安永尚志編：第1回資源共有化に関する研究成果報告書，217頁，2003
- [86]安永尚志編：第2回資源共有化に関する研究成果報告書，237頁，2005
- [87]安永尚志編：共同研究「文化情報資源の共有化システムに関する研究」，研究成果報告書，151頁，2006
- [88]安永尚志編：日本文学国際共同研究（ICJS），研究成果報告書，177頁，2006
- [89]ホームページ：日本古典文学本文データベース，<http://www.nijl.ac.jp/>
- [90]ホームページ：国際コラボレーション計画，<http://world.nijl.ac.jp/~kiban-s/>
- <注>上記リストには研究協力者による研究業績の一部を掲げた。

